

万葉図書・情報室だより66号

藤原京遷都1330年

持統8(694)

年にわが国で初めての、条坊制に基づいた都が、奈良盆地の



南側(現在の橿原市、桜井市、明日香村)に誕生しました。それが「藤原京」です。条坊制とは、南北方向(条)と東西方向(坊)の直線道路を碁盤の目状にめぐらせることにより区画した仕組みのことをいいます。

『日本書紀』において「新益京(あらましのみやこ)」と表記される藤原京は江戸時代に賀茂真淵や本居宣長に言及されるようになるまで注目されていませんでした。近年に入ってからようやく発掘調査が行われるようになり、だんだんとその全容が解明されつつあります。実は日本の正史である『日本書紀』や『続日本紀』には「藤原宮」という記載がありますが、「藤原京」とは記されていない。「藤原京」と記載があるのは『万葉集』に一例のみです。「藤原

京」とは、「藤原宮」の周囲に作られた京ということで後世の学者によって定着した名称なのです。ただこの文中においては便宜上、「藤原京」と記します。

最近の発掘調査により、東西・南北共に約5.3km四方の都であったという説が有力になってきています。平城京の左右京の東西の長さは約4.3km、南北は約4.7kmとされていますから、この説が正しければ平城京を上回る大きさの都であったといえます。

一時期を除き、それまでの宮・都は飛鳥の地に置かれました。ただ飛鳥の地は盆地のため狭く、儀式を行う施設も、また多くの人々が住むための場所も十分に確保できていませんでした。天皇を頂点とする律令制中央集権国家を目指す天武天皇にとって、その象徴ともいえる、大きな都の建設は悲願であったといえるでしょう。残念ながら天武天皇は都の完成を待たず



すが、皇后であった持統天皇によって遷都が行われます。

春過ぎて 夏来るらし 白栲しろたへの衣ころもほ乾したり 天の香具山あまのかぐやま

持統天皇(巻1:28)

―春もおわり夏がやって来たらしい。純白の衣を乾している。天の香具山よ。―

青い空に木々の緑、香具山にかけられた白い衣。とても色鮮やかな、まるで絵画のような風景が目につかびます。衣は花、もしくは雪をたとえたという説もありますが、歌のとおり白い衣ととらえるならば、四季の移り変わりを素直に喜びつつ、戦乱や政争を乗り越えようやく訪れた平和な今の自分の治世を亡き夫に誇る、そんな気持ちも持統天皇の心の中にはあったかもしれません。

この地に都が置かれて1330年。今も私たちはこの場所に立って大和三山を眺め、往時の人々に想いを馳せることができます。藤原宮跡は「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」として平成19(2007)年に世界文化遺産の暫定一覧表に登録され、令和8(2026)年の世界遺産登録を目指して



います。春は桜と菜の花、夏はハス、秋はコスモスと、四季折々の景色が楽しめる場所として多くの人々が訪れる場所でもあります。万葉文化館からも車で10分程度ですので、当館にお越しの際は一度足を延ばされてみてはいかがでしょうか。

(司書 藤原文代)

※万葉歌及び口語訳は中西進『万葉集全訳注原文付』による。

〈主な参考文献〉

『なるほど「藤原京」1000のなぞ』

(橿原市他編/柳原出版)

『飛鳥の宮と藤原京 よみがえる古代

王宮』(林部均/吉川弘文館)

『都城藤原京の研究』

(竹田政敬/同成社)

利 用 寮 肉

図書室のご利用は無料です。

閲覧でのご利用になります。

開館時間：午前10時～午後5時半

休館日：月曜日(祝日の場合は翌平日)

日)・年末年始・展示替日

コピーサービス：白黒 1枚10円

カラー1枚50円

奈良県立万葉文化館万葉図書・情報室

奈良県高市郡明日香村飛鳥10

0744・54・1850(代)